て行つて、わざ〳〵其の子を慰めてやるのだ。

「今日は、お金がないからね、今度は、おばさんが買つてくれるさうだ」

さう云つて居る時、生別れのお前が、もし、かう云ふ風に納豆が賣れなかつたら——と突評子もない事を考へ出す、お前の母親も優しい氣の弱い女性だつた。從つて、お前も、優しい氣質になつて居やう、さうすると、賣れなくて、泣くかも知れぬ、など云ふ妙な想像すら浮んで來るのであつた。

一番辛らいのは、九歳位の女の子が叱られて居る姿だ。

父は、家では一切子供を叱らぬ事にして居る。

此の父は母も父も嚴格であつた爲めと、兄弟が多かつた爲めか、どうしても子供の時を考へると、親に甘へたと云ふ記憶がない。思ひ出は叱られた事ばかり、それだけに幼ない時を追想する事が堪らなく辛く厭である。そして、子の甘へて居る姿を見ると、今でも羨ましいのだ。

叱られた子の堪らない寂寥、人生への絶望的な感懷、それを知り盡して居るのだ。

だのに、時々、お前位の子供が、ひどく叱責されて、泣いてゐるのを見る事がある。すると、其の時、その泣いてゐる子の父を母を、此の父は憎まずには居れないのだ。時には堪られぬ怒りすら發する。

かう云ふ時、此の父の心の底に、何となく、お前が、何處かで叱られて居るやうな氣がするのだ。

生別れしなければならぬやうな間柄だ、お前を此の父の手から奪つて行つた人々が、此の父をよく云ふ筈はない。お前が、叱られるやうな行爲をした時、それが頑是ない子供のいたずらであつたにしても、

「あの親の血を引いて居る！」

と云ふので、其處に、餘計な憎みを加へられはせぬか、若し、お前の母が再婚でもして居れ

ば、尙ほのこと、お前は、さう云ふ根據のない、大人の、つまらぬ妬心からの憎惡も序に、身に受けなければならないのだ。

「子を叱る親よ！　消へてなくなれ！」

此の父は、叱られる子を見ると泣きたい氣持ちになる。

叱られるならまだいゝ、お前が何處かで、虐められてゞも居たら――あゝ、それを思ふと此の父は胸が張り裂けるやうな思ひがするのだ。

虐められる――と云ふ經驗も、ぐんと積んで來た逆境不遇の此の父の半生涯であつたから――。

たゞ一つ、此の父の心の安まるのは、お前の名前だ。

お前が生れた時、お前を一度も見なかつた私の父が、それでも名だけは、つけてくれたのだ。それは私の祖母の名を、そのまゝ取つたものだつた。だから、お前は生別れをしても、父の方の曾祖母の名を名乘つて居るのだ。それだけは生涯離れない。それだけが、今の、たゞ一つのつながりである。

が、お前が大きくなつても祖父を怨んではならない。

祖父は大體、孫には緣の薄かつた人だ。祖父、つまり此の私に取つての父は、當時、私の結婚に不贊成であつたのと、も一つ、孫の愛を生むだけの餘裕がなかつた。と云ふのは祖父には子供が多くて、つまり、お前の伯父叔父達が次々と生れ、此の父は、親子程年齡の違ふ弟を持つて居たのだ。孫の愛は、末子の愛で飽滿してゐる。その上に、お前の祖父たるべき人は、物質的に非常に危惧を抱いて居た。それは此の父の腕の鈍さからだつたから、已むを得ぬにしても、お前と云ふものが生れて、その爲めに祖父の經濟を多少に關らず脅かすものと見たらし

い。それ故に、お前を見ることを避けた。つまり、當時の戸主としての責任回避をしたゞけでお前が憎い譯ではなかつたのだ。

これは、ひとり、お前のみではない、お前が家にあれば、當然從弟であるべき、又は從妹であるべき、もしくば、お前の妹たるべき、其後の祖父の孫達は、誰れ一人として祖父の顏を見たものはないのだ。祖父は、臨終の際、わが子と、わが妻には圍繞されて逝つた。それも、獨身の子供達ばかりに！

お前の祖父とて、臨終には、矢つ張り孫も見たかつたであらう、しかし、何人あつても見られなかつた運命は、それは、お前の祖父が執つた方針からとは云へ、淋しいではないか。

お前は女の子だ。生涯、子や孫に、淋しい氣持ちで生き續けた、氣の毒な祖父には、折があつたら墓詣りして慰めてあげねばならない。

が、お前の祖母は、つまり私の母は、そつと貧しい此の父の家へ、多少のお產の費用も屆けて呉れたし、時折來ては、お前の頭を撫でゝも呉れた。お前の髪の毛の濃いのを見て、

「父の方の系統ですよ」

と、笑つて、喜んで、お前の母の養父母、つまり現在、お前が傍に居た祖父母に語つたこともあるのだ。

知らなかつたことだが、お前の名前と同じ此の父の祖母、つまりお前の曾祖母は、ろくに口數もきかない程の溫厚な人であつたさうな、そして、かなり辛い人生、淋しい運命に終始した人であつたさうな。

その、大おばあさんの名前を、お前が貰つたんだ、此の父には、その時も、既に何か因緣があると考へられる、今日では——。

三四年前の事であつた。此の父は、久しぶりに、お前の消息を聞いた。が、その消息は、餘りにも頼りないものであつた。

お前の母は、此の父の嫂の名古屋の里を知つて居るのだ。これは、お前の母を連れて、此の父が一度立寄つた事があるからだ。

其處へ、本當に、ひよつこりと、お前の母は現はれたさうな、そして、先づ、此の父の安否を尋ねて、

「奥さん、いらつしやるのですか？」

と問ふたさうだ。嫂の里では、

「え、、いらつしやいます、お子さんもあります」

簡單に答へたさうだ。すると、お前の母親は、しばらく默つて居て、

「子供は無事に育つて居ます、と、折があつたらお傳へ下さい」

とだけ云つて、處も名も告げずに去つたさうだ。

「何でも自分は何處かで働くか、嫁入りしたかして、子供は兩親が養つて居る、と云ふやうな話でしたよ」

大した話題でもないと、至極、あつさり、ゴシップ的な興味だけで、その事あつて一年も經過した後、嫂から初めて耳にした時は、此の父は、心中怒りを發した。

何故なら、

「もつと早く何故告げてくれぬのだ、そんな事があつたら嫂の里から、手紙を奥れてもよいではないか、それに、子供の消息を、何故も尠し詳しく聞いて置いて貰へないのだ、お前の母の生活狀態も——」

口には出さなかつたが、此の不滿で一杯だつたからである。

今は、お前の消息を更に聞く由もない、お前の母の知つてゐる唯一の場所、嫂の里も、そ

れから後は二度も三度も移つたから。

それに、お前の母は、お前の周圍は、此の父の、本當なら誰れでも知り易い仕事から、此の父の消息をも知る事が出來ずに居るであらう、智識的には、餘りに遠い世界、書籍、雜誌、新聞、さう云ふものと親しみの薄い、著書名や作者名、ラヂオの講演などとは興味も馴染も甚だ鈍い心境に生活してゐるのであらうから——。

此の父の學友に、地方官をしてゐる者がある。此の父は、其の友が、早くお前が住む土地の地方官になつて呉れる事を祈つてゐる。そして、お前の土地とは遙かに遠い九州などに居るのを、もどかしがつて居るのだ。

それは、その學友が、お前の土地へ赴任したら、影から、充分、お前の日常が、これ迄の經過が、そして將來が、しつかりと見て貰へると思ふからだ。時には堪らなくなつて、興信所や秘密探偵に、調べて貰はうか、と思ふ時もある。然し乍ら、此の父は、さう云ふ事が、もし或る安住の生活にあるお前の身邊を、惡く變化させ、それに影響されて、お前の心を、悲しく動搖させては——と、其點を怖れてやめて居る。

何でもない平靜な池へ小石を投げ込む必要はないから。それは愛するものの、する事ではないから。

しかし、いつぞや某名士が死去すると、その名士と生別れの妻と娘が、それを新聞紙上で知つて、恰度お前の住んで居る土地から、突如現はれた事があつた。それを讀んだ時に、此の父は、非常なショックを受けたのである。

此の父が、假りに、その名士のやうに偉くなつたり、何かで、お前達の耳へ入る程な名聲を博したら、お前達は、必らず、此の父を索ねて來るだらうと思ふのだ。

その時に、笑つてはいけない、大眞面目で、此の父は、二千圓欲しいなあ！　と思つた。それは、お前が幸福に育ち、一人前の女性にして貰へたお禮に、いや、せめても此の父の淋しい

父性愛を滿足させて貰ふ爲めに、お前に受け取つて貰ひたいと思ふものだつた。

が、現在でも金に餘裕などない、一介の文士だ、さう云ふ事を夢想するだけで、二千圓の金などありつこはないのだ。

けれども、それを、死ぬ迄に、お前の爲めに殘して置きたい、それだけの努力がしたい、とは、內心眞實に考へてゐる。闕んでも居るのだ。

何と云ふ、みすぼらしい父性愛だらう、笑つてくれるな。しかる考へだけあつて、なかなかに實行力のない不甲斐ない此の父だ。志だけ汲んで置いてくれ！

現在、此の父には娘が二人ある。まだ小さい、勿論、お前の妹だ。みんな、かわいゝ、その二人が今日も、かうして書いて居る此の父の書齋の前の廊下へ來て、

「とうちやん、おやすみなさいませ」

「トウチヤン、オヤスミチヤイ」

と、それ〳〵の調子で云つて寢室へと行つた。

その後姿を、もつと、かわいがりたい、何處迄行つても表現し盡せぬ親の愛情を籠めて見送り乍ら、この子供達の將來のことも、頭に上つて來る。

眞實の親の愛に、充分浴させて。叱らないで。可愛がつて——希望の道に進めてやる」

さう思ふと、すぐ、お前のことだ。何處で、どう云ふ運命を强ひられるかも知れない、と思ふと不安になる。

「どうぞ、秘めた父の血が、そのよき血だけが、働いてくれ、人生を間違ひなく、踏み違へぬやうに、知慧も德もあるやうな人に成人してくれ！　いばらの道よ、お前の前に現はれるな！」

と、此の父は祈りたい。

「女の兒ですから、一生に一度は遭へますよ」

と誰れかゞ云つてくれた。それを待たう。

同業長谷川伸氏は、實に四十七年目に「瞼の母」――實母に邂逅した。然し、此の邂逅は悲劇的場面は作らなかつた。其處には人生に成し遂げたものがあつたから――。

それだ。お前に會ふ時に、此の父は、もつと〳〵立派になつてゐなければならない。お前に失望を感じさせないやうに。

同時に、お前も、此の父を、生別れの父を、父から云へば天災的な生別れの、此の父を、一層に悲しませ、一層に泣かせるお前であつてはならない。これは要求する此の父が間違つてゐるかも知れぬ。だが、人間の本能は、それを望むのだ。淋しがらせたり、悲しませたりせないお前として、此の父の前に立つてくれ！　それを、お前の人生の爲めに祈る。

さう〳〵思ひ出せば、あの、お前の母達が逃げ出す、どさくさまぎれに、恐らくは、お前の母が、お前の他日の爲めとて、此の父の書いた短冊と間違へて、此の父の友人の俳句を認めた黄色の短冊を持つて行つた。きつと、お前は、それを大切にしてゐるだらう、それが悲しい物語を云ふのではないが「石童丸」の腰に差した脇差なのだ。再會の日の記念なのだ。證據品なのだ。

證據が必要な父娘の對面――考へても潤ひがない。が、それが、此の父とお前との運命だ。

しかし、お前は今年九歳だ、それだけが、此の生別れの父を勵ます。

女性の危險年齢へ入る迄に、あゝ！　此の父は、お前を確かめたい。

そして、腹の底から、お前に、しみじみ人生が語りたい。

生別れの子、お前に、荒い風よ吹くな！

そして、お前の母に喜び恒にあれ！

すく〳〵と、お前よ、伸びてくれ、ひねくれて呉れるな。

お前の母が、お前が手足纏ひにならぬやうな運命にあつてくれることを、此の父は、念じて居る。祈つてゐる！

苦難の人生記錄

——兇刄に兩手を喪つた中年婦人の惱み——

（高橋けいさんの人生は餘りに可酷な出發であつた、今、私は、兩手のない、けいさんの心持ちになつて、けいさんに代つて、話そのまゝを綴ることにする。從つて、この一篇中私とはけいさんのことである。……著者）

血に咽ぶ慘劇の一夜！

寒い晩でした。

群馬縣倉賀野の驛近く、と云つても淋しい永泉寺の離れ座敷で、私は、三味線のお稽古を午

後九時頃に終りました。

私の年齢は、其の時、十四。

私は便所へ行つて、寢やうとしました。田舍の便所は、淋しいものです。わけて、永泉寺の便所は、庫裡と本堂との間にありまして、庫裡の外れに、龕燈を置く場所がありました。

恐い盛りの少女とて、私はいつも、小僧に龕燈を持つて行つて貰つて、庫裡の戸を開けてもらひ、大急ぎで、便所へ走り込むのが常でした。

その夜は、例にも增して便所へ行くのが厭でありました。

恰度、小僧が、戸を押し開けて呉れたので、私が走り出やうとすると、突然、

「ぎやつ！」

と云ふ凄まじい叫び聲を發して、小僧が龕燈を、ばつたり、落しました。

「呀つ！」

私は、何かしら、大變な出來事が起つたと思つて、用を達すどころか、寢部屋の方へ飛んで來て、

「大變です！　大變です！」

と、眞蒼になつて、叫びました。

すると、養父が、

「何だ、何だ？」

と、寢卷の儘で、便所の方へ出て行くと、忽ち、養父も、

「きやつ！」

と叫んで、

「いたゝ、いたゝつ！」

と、肩を押へて、部屋へ轉げ込み、矢庭に、寢部屋の奥の納戸に飛び込み、錠を下ろした音がします。

私は、容易ならぬ一大事とは思ひましたが、まだ、何が起つたか、はつきりはしません。

で、おろ〳〵し乍ら、ちよこ〳〵と廊下へ出ました。すると、その廊下の闇に誰れかゞ、ぴかりと光る物を下げて立つて居るではありませんか。

私は思はず、その廊下に、べたん、と尻餅をつきました。そして、眼を瞑つて、兩手を合せ、

「御免なさい！　御免なさい！」

と拜みました。

その時、竹刀で、叩かれるやうな氣がしましたが、直ぐ全く、氣を失つてしまひました。

それから、何時、經つたか知れません。

が、不圖、氣がつくと、私は、障子の棧に、がつくりと、首を垂れて居たのでした。

と見ると、自分の手が、ぶらり、と下がつてゐるではありませんか、

「斬られたッ！」

と感じた瞬間です。

納戸の方で、大きな音がしました。それと同時に、寢部屋の六枚屏風が、ばつたり、私の身體の上に倒れて來ました。

その時、豆ランプが消へて、眞の闇となりました。

私は、生きた心地がありません、何だか、ばた〳〵音がして、確かに養父の聲で、

「辰！　辰！　何故、俺を殺すのだつ！」

と、悲痛な叫びがしました。それと同時に、どたり、と倒れる物音がしました。

それから、何の物音もしないのです、たゞ、遠くの方で、

「うーむ、うーむ！」

と、牛の唸るやうな呻き聲が、闇の底を物凄く、漂つて參ります。

私は、凝つと、身動きもせず、呼吸を殺してゐました。體の何處となく、痛いのではなく、熱いのです、そして、氣持ちは、まるで、地獄の底にゐるやうです、この世の中が、沈んでしまつたやうな、何とも堪らない淋しさです。

私は、たゞ凝つとしてゐました。

石のやうに固まつて、その恐ろしさ、その淋しさ、お話になりません。

それから、長い〳〵時が經つたやうです、體は、だん〳〵氷のやうに冷えて來ます。

漸くのことに、人聲がしました。

ほつ、として耳を傾けると、嬉しや、駐在所の巡査らしいではありませんか。

「小僧！　何處だつ、何處だつ！」

と云ひ乍ら、燈を持つて參りました、そして屏風の下に、逼息して小さくなつてゐる私を見付けて、

「呀つ！　おけいちやんが斬られてる！」

と叫びました。

十手を持つた巡査の姿を見た、私の喜び、それこそ、本當に、地獄で佛に會つた心持ちです。

私は必死に叫びました。

「小父さん！　助けてつ！」

と。そして、

「一緒に、連れて行つて下さいつ！」

しかし、巡査は、方々、見廻して、

「こいつは大變だつ、とても駄目だ、俺一人の手に負へぬ」

と、その儘、出て行つて終ひました。私の、その時の、悲しい、淋しい、情けない氣持つたらありません。

再び闇の中で、熱い感じと、凍へる感じとに、たゞ〳〵固く〳〵なつて居ました。

夜の白々明ける頃、大勢の人達がやつて來まして、先づ、第一番に、三味線のお師匠さんが

「まあ！　おけいちやん！」

と叫んで、涙ぐんで呉れました。

「何か、掛けて下さい、寒いつ！」

私は、かう、必死に叫びました。

けれども、

「檢死が濟まぬ中は、傍に寄れない」

と云つて、誰れも寄りついては呉れません。

間もなく、警察の方がゐらつしやつて、やつと、體に、着物をかけて貰ひました。警察の方から昨夜のことを詳しく訊ねられたので、私は、私の見ただけ、聞いたゞけ、を、すつかり話

しました。すると、

「なか〳〵、しつかりしてゐる」

と、讃められました。

醫者が參りましたので、私は直ぐ、

「診て下さい！」

と嘆願しました。しかし、

「小僧から先にやれ」

と、後廻しにされて、何だか、氣が遠くなるやうな心地がいたしました。

小僧は、日本刀で、頭をやられて、骨に達する重傷。それに耳が、とれかゝつてゐました。

私は、左の手首から先きを斬られ、右の手は指が、二本だけ殘つて居りました。

つまり、合掌した手を横なぐりに、さくりと斬り拂はれた譯です。

それと、喉と頭とに、大怪我をして居りました。

氣の毒なのは養父です。元來、人の善い評判で、私にも、よくしてくれまして、六十八の高齡でしたが、一旦納戸に隱れたのを、襖を刀で突き通されて、

「あつ！」

と聲をあげたばかりに引摺り出されて、慘殺されて終ひました。

悲慘な一團

犯人は、その朝、高崎署へ、自首して出ました。

そして、

「深い怨みがあつて斬り込んだのですが、目指す一人を斬り洩らして、つい、氣が立つて居たものですから、罪のない子供を二人迄、殺してしまひました、充分、重く罰して下さい」

と申出たさうです、つまり、私も小僧も、死んだものと思つたのでせう。

目指す一人を斬り洩らした、と云ふのは、つまり養母のことでした。

その養母が、養父と同じ部屋にゐながら、どうして兇刄を逃れたか？　と申しますと、恰度私が斬られた時、あつ、と思つたのでせう。忽ち蒲團から脫け出して、本堂横の廊下の供物を載せる大きなデスクの下に、身を隱したのです。

すると、犯人は、養母を探し廻つた揚句、方々、拔身を突き通して歩いて、そのデスクも、上から、二三度、拔き身で叩いたり、突いて見たりしたのです。

だから、養母は、その切先で、指を怪我して居りましたが、聲を出しませんでした。

すると、犯人は、居ないものと諦めて、再び、納戸の方へ引き返しました、つまり、その時養父を納戸から、引き摺り出して慘殺したのですが、養母は、犯人の姿が納戸の方へ消へるのを見濟まして、急いで、デスクの下から匍ひ出して、町の知人の宅へ逃げ込んだのでありました。

巡査が來たのは、氣丈な小僧が、頻死の傷を受け乍ら、塀を乘り越して、訴へ出たからでした。

さて、かうした、血腥い慘事が、どうして起つたのでせう。犯人は、辰五郎と云つて、倉賀野町の相當な質屋の二番目の息子でありましたが、放蕩で、家を勘當されて居たのを、二十一歳の時、漸く許るされたのです。

辰五郎の父は實父ですが、繼母であつたのです。先づ、何か職を與へねばならぬと云つて、永泉寺の持家だつた、水車小屋を借りて、住まはせ、その仕事をさせることになりました。

ところで、年齡は若いが、女房がなくては、又、放蕩されてはならぬ、とあつて、私の養母が、自分の姪を娶つてやつたのでした。

最初のうちは、夫婦仲も良かつたのですが、間もなく、辰五郎が、放蕩を再びやり出したの

で、平素、酒を呑まぬ時は、溫順な性質ですが、酷い酒亂の癖があり、醉つて歸つては、亂暴し、嫁を慘酷な目に遭はせるので、到頭、危險を感じて、養母は、寺へ一と先づ、引き取つたのでありました。

そして、寺に置いては物騷だから――と云ふので、高崎の實家へ歸してしまつたのでした。

それが、すつかり辰五郎の氣に障つたのでせう、女房を隱された怨み、それが結局、この慘事を招いたものでした。

私は、右手の指が腐つて來ると云ふので、即日寺で、關節から、切り除きの大手術を行ひました。

その時、痲醉劑を嗅されましたが、その心地のよかつたことは、今以て、忘れません。

手術が、濟んだ後、痲醉から醒めて、後の痛さ、それは、とても堪へ得られないものでありました。

それよりも、殆んど全快する迄、繃帶で包んであつたので、知らなかつた、私自身の手を、よくなつてから、はつきり、と見た時の驚き！　悲しみ、ぼろ〳〵、涙が出て、涙が出て、生甲斐なさを、子供心に、つくづく感じて、人にも、もはや顏が會はされない！　それこそ死んで終ひたい氣になりました。

とんでもない、傍杖の兇刄にやられた私は、養女であつたのでした。私の實家は、權濱で、相當やつて居たのでしたが、父が死んでの後は、兄弟姉妹も多いので、聊かの緣あるため、永泉寺へ貰はれて來たのでありました。

それが十一歲、それから兩手を喪ふ迄、炊事から洗濯、それに學問がしたいのに、させては呉れず、たゞ〳〵三味線のお稽古だけをさせられました。

私は、實家へ歸りたくて仕樣がないのでした。だからして、慘劇のあとに寺の後住が來て住めなくなつたことを、かへつて喜びました。

それは、不具になつた身を悲しむより、寧ろ、實家へ歸れる、と云ふことの喜びの方が、かへつて大きくありました。

恰度、急を聞いて、實母も駈けつけて呉れましたので、そのまゝ家へ歸りたいと思ひましたが、先づ創の癒る迄は――と、養母と倉賀野の町に居ました。

そのうち、養母は、寺から持ち出した荷物を始末して、郷里の信州へ旅立ち、そのまゝ、行衞不明になつてしまひました。

私は、籍を戻す必要と、その養母の行先きへ、幾度か手紙を出しましたが、皆、附箋つきで戻つて參りました。從つて、私の籍は、どうにもならず、今も尙、養家先きの高橋を名乘つてゐます。

實母も、私の手を見る度に、

「あゝ、いくら貧乏しても養女になどやるんではなかつた」

と、ぽろ〳〵、涙を滾しました。

しかも、懷しい實家に歸つてみれば、あゝ！　何と云ふ始末でせう！　ありし日の影もなく横濱の場末に二階借りの憐れさ。

長兄は家出して行衞不明、二番目の兄は、稅關に給仕として勤めて居ましたが、脊髓を患つて辭職しまして、私の憐れな姿と家の沒落に、大きなショックを受けたのか、發狂してしまひました。

たよりとしました姉の夫、義兄も、其の時、永年苦心の試驗が通つて、上海の領事館へ赴任してしまつてゐました。

其處で、狂人の兄が暴れた爲め、南太田へ引つ越しましたが、折の惡い時には惡いもので、長姉が東京から離緣されて戻つて參りました。

狹い、六疊の間借り生活、其處に、氣の狂つた兄と、離緣された姉と、身體の弱い母と、不

具の私と――、まあ！　何と云ふ不幸を集めたものでせう、亂暴する狂人を看護し乍ら、しかも、口を糊する爲めに、ハンケチのヘリ取りをしたり、袋を貼つたりして暮して居るのです。

兩手のない私が、おぼつかない腕つきで袋を貼る姿！

悲慘な、世にも悲慘な一團でした。

不具の身に一家を負ふて

夕日は
かくれて
道は　はるけし
行末いかにと
思ひぞ　わづらふ

わが主よ　今宵も
共にゐまして
淋しき此の身を
はぐ　くみ　たまへ

横濱、南太田町の角にあつた教會から、このセンチメンタルなメロディが流れてまゐります。

私は、汚い着物の袖を搔き合はせて、いつまでも〳〵佇んで聞いて居りました。

何と云ふ、私を魅するリズムでせう、私は、雨が、ぽつ〳〵降つて來ても、相變らず、濡れ乍ら、立つて、聞き惚れて居りました。

その時、

「あゝ！　あの教會の中へ入つて、あの歌を唱へたら、一緒に聲を張り上げて！」

さうは思ひましたものの、情けない自分の兩腕を眺めると、愧しくて、どうしても、教會へ

入れません。

私は、幾度も幾度も、教會の周圍を、ぐる〳〵歩き廻つたものでした。

晩になると、教會へ、讃美歌を、そつと、聞きに行く、それが、十六になつた、憐れな私の許るされた、たつた一つの娯樂であつたのです。

けれども、雨の降る日は、讃美歌も聞きに行けません、そして、氣の狂つた兄の怒號と、淋しい〳〵母の顏とを見詰めて暮らさねばなりませんでした。

その頃、野毛に、生田さんと云ふ、亡き父の友達があつて、不意に訪ねて來て下さいました。

そして、私の姿を見るや、大層同情して下さいまして、兎に角、戸部の教會の日曜學校へ來い、と連れて行つて頂きました。

私は、それから日曜學校へ通ふやうになりました。その日曜學校、それが、どんなに樂しみであつたことか、喜んで二三年通つて居るうちに洗禮を受けました。

そして、現神戸の婦人ホームの會長をしていらつしやる城さんとお知り合ひになりまして城さんが、私のことを、聖經女學校の總理である米國人のミセス・バンペテンにお話し下さいました。

ミセス・バンペテンは、私の身の上に大層同情して下さいまして、共立女學校のミス・クローベーに話して、此の不具の身が、十九歳で、女學校へ入學出來るやう、許可して下さいました。

さあ、私は、天へも昇る心地になりまして、みんな十四五歳の可愛らしい女學生に交り乍ら一心に勉强させて頂きました。

校長は、ミス・ルミスと仰つしやいましたが、此の方も非常に私の身の上に涙を注いで下さつて、私の勉學を助ける爲めに、特別教育を授けて下さいました。

しかし、ミセス・バンペテンは、私の食べる問題まで考へて下さいまして、月々三圓宛の補

助をして下さいました。

その頃です、學校へ通ふのに雨が降つても、傘のさせない私は、母に送られ、迎へられて通學しましたが、此の補助金で、始めて、傘の柄に特別な裝置を施した、私で持てる傘を買ふことが出來まして、他の生徒と同じやうに、傘さして、一人で通ふことが出來るやうになりました。

その時の嬉しさ、形の人並であることの喜び、それは、不具の身でなければ、到底、想像の出來ないものであります。

しかも、私は、尙苦しい家計を助ける爲め、ミセス・バンベテンから編物を敎へて貰ひました。

双手のない私に編物！　何と云ふ奇妙な仕事かと思はれるでせう、しかし、手の無い腕に編棒を縛りつけて編めば、左程、細かい物以外は、出來たのであります。

それで、外人の子供の帽子、襯衣などを編ませて頂きまして、乏しい暮しを助けました。

私は、その編物を天職と心得て、それこそ、文字通り、一心不亂に働きました。そして、勉强も專心いたしました。その當時の私の心は、全く惠まれた嬉しさで、明るく朗らかに、神の愛を、しみじみと感じて參つて居たのでありました。

——處が、過激な勉强と、內職とが、とうどう、身體に祟つて來たのですか、私は、肺炎加答兒に罹りました。

已むなく、學校を休み、病院生活をするやうになりましたが、その時の、がつかりした氣持ちと云つたら、お話になりませんでした。

その淋しい、悲しい氣持ちを慰めて下さいましたのが、現在の高田女塾の高田敏子さんでした。

高田さんは、確か、當時は學校を一時休んで、郵便局かに働いていらつしやつたやうに記憶

いたします。親切にも、始終見舞に來て下さつて私の心を鞭ち勵まして下さいました。

倖に間もなく私は退院出來、又學校へ戻りまして、明治四十四年、共立女學校を卒業することが出來ました、その當時は、もう氣狂の兄は死にまして、上海からも姉夫婦が歸り、官を辭して大森に羅紗商を始めましたので、弟も其の方へ奉公に出し、一寸樂な氣が致しました。

續いて、聖經女學校へ入學しまして二年の勉強をし卒業して、寶來町のキリスト訓盲院に教鞭を執る事となりました。けれども、月給は八圓、しかも行衛不明だつた長兄が零落して歸宅したのです、母は動脈硬化症で病床に臥しますし、とても生活が堪りません、それで戻つた兄には麻糸つなぎをして貰ひ、私は初等科の生徒を別に教へて三圓づゝ貰ひました。しかし其の學校も經營困難なので、レース糸で巾着を編みまして其の收入の半分を學校に寄附して居た有樣です。

そのうち、月給は十圓に昇給しましたが、餘り過勞だつた爲めか、又しても肺炎加答兒に罹り、ミス・スレードと云ふ人の厄介になつて鎌倉の稻澤幼稚園で靜養することになりました。

その頃の家の方は、どうかと云ふに、又、長兄は家出をしてしまひますし、母は病床にあります、已むなく、まだ資力は無い乍ら、弟が習ひ覺えた羅紗をやると云ふので弟に嫁を迎へて母の看護をして貰ふことにしました。私は其後、根岸の療養院へ轉じて、其處で全快し、再び訓盲院へ勤めましたが、病氣が病氣であつた爲め厭がられる心地もしまして辭職して、私塾を開いて生徒を取り、弟と代る〳〵母を看護して居りました。

荊棘の道は何時まで續く？

現在、私の居ります此の大井町の川口寶生堂の主人は、弟の嫁の實家の者であります、私は、學校を辭職して以來、實は此の川口家の二階で、ミス・ルミスのお世話で編物をして暮して居たのであります、其の當時の川口家は横濱にあり、現在の寶生堂の主人夫婦と其の父母が

住んで居りましたが、間もなく川口家の母が亡くなりますると、誠に妙な話ですが、川口と私それから川口の妻と其の舅との間に、醜はしい關係でもあるやうな風評が立ちました。

しかも一方、弟の嫁は、私の母を震災の前年、見送ると間もなく看護疲れもありますか、二歳の女兒を置いて長逝してしまひ、川口家とは緣遠くなつて居ましたので、そんな噂を聞くと、私は直ちに、當時、大森に居た弟の宅の方へ戻りました。

しかし、それでも川口家の風波は納まらず、とうどう、川口の妻は離緣となつて歸國し、間もなく川口の父も病沒してしまひました。殘された川口は、男の子一人を抱へて途方に暮れ、とにかく私に來てくれと、切に賴むのです。私も、遂には其の熱心にほだされて、子供の面倒を見る爲めに川口へ參りました、しかし、出來ることなら、子供は實の母親の手にかゝつた方がよいと考へ、川口に離緣した妻を呼び戻すやうにと勸めました。

それで、氣が合はず去らした女房ではありますが、子の可愛さから川口は、はる〳〵、去つた妻の鄕里へ行き復緣を迫りましたが、時既に遲く、彼女は他へ緣付いてしまつて居ました。

行き掛り上、已むなく不自由な身體で、子供の面倒を見て居ます中に、川口の離緣した妻が其後、再嫁先で產後の肥立ちが惡くて死んだとの報知を耳にしましたので、川口は、もはや、全部が解決したのであるから、どうぞ正式に結婚して呉れと迫ります。

其處で、いろ〳〵、いやな思出の横濱を引き拂つて、大井町へ引つ越し、雜貨や煙草店を始めたのではありますが、私共の受けた洗禮から云ふと、同じ信者で洗禮を受けた者同士でなくては結婚は許されないことになつて居ります、もし、許されないとしましたならば、三十年の荊棘の道を、ともかくも愛と信仰で導いて下さつた外人の方々、親とも思ふ方々にも見放されなければならないのであります、それは私として到底堪へられない苦痛です。

さりとて、既に子供も六歳になり「母さん、母さん」と私を慕つてくれます、川口の主人も大體、身體の弱い人、此の上の苦勞もお氣の毒に存じて去るに忍びません。この事情を詳しく

訴へましたら、ミス・ルミスも、今度は結婚に贊成して下さいましたので、私は正式結婚は兎も角として精神的になりと、川口の子供を母として育てゝ行く事に、ほゞ心は定めて居ります。

何にしましても、私の身體も全く健康に復したとも云へません、それに此の不具の身です、孰れは弱い川口の主人と共に暮して、何かしら私は私だけで働かねばならないか、とも考へられます、しかし、今、正式に結婚すべきか、此の家を去つて獨り生活すべきか、多少の迷ひにあります、いづれ、はつきりとしなければなりますまい。

とにかく、私を慕ふ川口の子供だけは何處迄も見て行かうと存じて居ます、それが神への奉謝とも考へられます、義手は反つて不便ですから手首だけで凡ての用を達しては居りますが、ペンならば手紙も書け、編物も手首だけで、細かいものでなければ相當に出來ます。

思へば、日本の寺院で兇双に罹り双手を截たれ、それから以後、貧乏のどん底に狂人の兄弟病める母を抱へ乍らに、教育も受け、かうして暮らして參ることが出來ましたのは、一に外人基督信者の愛の惠みでありました。奇しきとも奇しき私の人生行路でありました。

けれども、これから先き、だん〳〵老いて行く私の身に、まだ〳〵荊棘の道は續いて行くやうに思はれます。

私は、たゞ、愛と祈りと、犧牲との精神を一心に把握して、不幸な生涯を、せめても神の御意志に遵ふまいと努力して居るのであります。

ふりかへれば、境遇の悲慘と比較して、神の惠みのみが燦として照り映へて居ります、私も亦、矢張り、不幸とは云へ、惠まれた子でありましたでせうか？。

支那に食はれた女達

結婚の進化

「結婚は同時に就職である！」

痛ましい標語ではないか。これでは神聖な戀愛が泣く。

が、更に、

「マリッヂ・イズ・マネイ」

になつてしまつては、現實の美の化身も、餘りに俗惡な黄金の奴隷だ。

文化は進んだ。然し、結婚意識は果して進んで居るであらうか。いや〳〵時には、掠奪結婚以前に迄顚落して居るのを見るではないか。

結婚を好餌とする惡魔の跳躍は實に甚だしい、結婚を人間性の本然の欲求として、極めて神聖に考へない限り、惡魔の伸す爪のチャンスは到る處にある。そして其處に聰明な明瞳を濁らせる、誠に愚かな悲劇が發生するのだ。

國際結婚の種々相は、どんなに悲しむべきテーマを提供し續けたであらうか、いや、今は極く手近かの、「支那に食はれた女」達のことを語らねばならない。

福清の誘拐地獄

臺灣の對岸、福清縣には今日尙ほ監禁同樣になつて居る日本の娘が百人餘りもある。これがみんな巧みな言葉で、富豪の正妻たることを夢想して、支那に食はれた哀れな犧牲者達である

福清の前面の海は、海賊の巢窟として有名な海壇島を始めとして、無數の島が浮んで居る。だから福清の農民は、罌粟を栽培して阿片を作つて居るが、漁民は、みんな海賊兼業なのだ。

其の他に商人が居る。此の商人が、そも〳〵曲者であつて、多く日本へ行商に來るのだが、此の行商人は、本業が誘拐專問のがあつて、誠に油斷も隙もならないのである。

娘の家へと近附いた此の行商人は、神戸邊りで仕入込んだ織物や、翡翠や、にせダイヤなどや、譯の判らぬ寶石を以て、盛んに押賣りをする。そして娘が欲しさうな顏をすると、べら棒に負けたり、又は安反物を無代で與へて、娘の心を動かして、さて、

「私、本國に財產うんとある、日本見物したいから、ついでに商賣する、ついでに日本娘さん妻に迎へたい、私、本國樂な國ある、何でもある、樂出來る、私、娘さん好き、大好きある」

てな出鱈目を並べて、地方や都市の純な生娘を誘惑するのだ。

見た處、大層結構らしいものは貰ふ、その上、支那人の圖々しさで、いつまでも、執拗に迫つて來る。其處で、つい關係が生じてしまふ。

さあ、さうなると、すつかり先方の思ふ壺にはまつてしまふのである。忽ち歸國するから一緒に行かうと云ふ。支那人と云つたつて人間に變りはない、男がよくて金持であれば——と無智と虛榮と、ほのかな寂寥とは、つい海を超えることを承諾してしまふのだ。

だが、此の女性達が、一歩足を支那の土に踏み入れたら、それは地獄だ。それを知つて居ればこそ、日本官憲は、いそ〳〵と支那人と連れ立つた日本娘を見ると、呼び止めて注意するのだ。しかし、夢を見て居る日本娘は、反つて官憲の親切を逆に取つて、支那人に寄り添つて行つてしまふ。

やがて、夫たるべき人の金殿玉樓の前に立つのだ。何とそれは電車の軌りもなければ、自動車の音もなく、電燈の影さえない、草深い片田舍の傾いた一軒家、土と竹と藁とで建てた蒲鉾小屋なのだ。

そして、正妻は勿論、第二號のある者すらあるのだ。第三號、第四號と云ふ全く奴隷の境遇に置かれ、支那式の生活を强ひられ、激しい勞働に粗食に日に〳〵心も身體も刻み削られて行

くのである。

逃げ出さうとする時は、もう遅いのである、福清附近には郵便局がない。そして逃げやうとの氣配でも見せやうものなら、周圍の者が皆で監視し見張りをするのだ。逃げ損なつたら半殺し、いや全く殺されてしまふのである。福州の領事館、それは後悔した彼女達の唯一の救ひの神だ、しかし、其處迄辿るのは、容易ならぬ苦心が要る。

晝間は鍬の中にかくれ、夜道を歩き、三日も四日もかゝつて、命も絶え〳〵に辿り着いて助かつたものがある。

神田淡路町の某料亭の娘山田千代子（假名）さん、長崎縣東彼杵郡西大村森園郷生れの大山千代子（二七）等々だ。此の少數の脱出者は、臺灣基隆に着くと、身震ひして、尙ほ毎日毎夕吸血鬼の思ふまゝに痩せ細つて行く、同じ運命にあつた他の百餘名の娘達を案ずるのである。

この支那人行商の誘拐の手段は巧妙を極めたものである。

金はいらない、たゞでやると云つて置いて行つた反物を、數日後には、

「あれ還してくれ」

と、もはや裁つて仕立たことを知つての上で要求し、貞操を奪ふ迄は執拗に迫るのもあれば大きな掌の上で、天婦羅の金指輪や、眞珠の首飾り、翡翠の帶止めなどを弄んで、純な乙女心を怪しく眩惑させる、其の奥には得意の甘い言葉で出鱈目千萬の誘惑の祕術を盡すのだ。

「買はんか、繭紬」

と云つて來る鈍重な愛嬌たつぷりな支那行商人の顏に油斷はならないのだ、更に、支那人は金がある！　など云ふ妄想は、ゆめ！　考へてはならぬ。

貞操の尊重、結婚の本義、それを失つて女性には何處にも幸福はないのだ。

——が、この支那行商人の手段は大東京のモダン風景の中にも、しば〳〵用ひられて居る。

スマートな紳士の名に於て。

考ふべきである。

滿洲事變の口火

多門師團長がチ、ハル入城の時、親しく手を執つて禮を云つた殊勳の女性がある。名を植松フデと云つた。

彼女の本名は木村文子(二四)、新潟縣東蒲原郡下田鄉出身で東京牛込に在住して居た、木村石次氏の二女、東京府立高女出の美人である。

が、彼女は、行商人ではなかつたが、矢張り支那に食はれた女性であつた。卒業當時、十九歳の時に、一支那人と知つて、忽ち戀仲となり、唆かされて、手に手を執り、東京を出奔して滿洲へ、戀の殿堂を築く爲めに喜び勇んで行つたのだ。

が、それは御多分に洩れなかつた。彼女は流轉の身となつてしまひ、遂には萬某の妾となつ

て、チ、ハルの朝日旅館で稼いで居た。

或日、一支那兵が一杯機嫌でやつて來て、文子を前にし乍ら、

「俺の親分は太い野郎だ、第三團長代理だが、俺達に日本の中村少佐や井杉を銃殺させて、二人の所持金は、自分で着服してしまつて、俺達には約束の金も呉れない、腹が立つて堪らないから、一杯ひつかけて居るんだ」

と語つた。

文子は、はつ、と思つた。が、何でもない風に裝つて、その支那兵に酒を勸め乍ら、事件の一切を聞き取つたのだ。

それから、人目を忍んで、極力搜査に從事して、確證を握り、

「畜生！　見ろ、怨を晴らして呉れるぞつ」

と、我軍に密告したのであつた。

忽ち、我軍の活動は開始され、滿洲事變の口火は切られたのであつた。

虐まれ、瞞された乙女の、烈々と燃ゆる後讐の念が、骨に刻まれた侮辱の悲しみが、此の勇敢な働きをなさしめて、大和撫子の面目を躍如とさせた。

が、然し、何と痛ましい話ではないか、憐れな一犠牲者ではないか。

張宗昌の第十七夫人

支那の政客が、よく亡命する別府溫泉、其處に婢娼たる花一輪があつた、と云ふと馬鹿に時代めくが、藝妓靜彌だ。

この靜彌に、元山東督軍張宗昌が亡命中に、すつかり魅せられてしまつた。楚々たる風情その黑一抹の明眸、すつかり參つた張宗昌は、大枚三千圓を投げ出して、靜彌を落籍したのである。

そして靜彌は、朋輩の羨望の中に、張氏夫人として張に從つて日本を去つた。

が、行つて見ると、何と、夫人は夫人乍ら第十七夫人ではないか。しかし、靜彌は張宗昌によく盡した。

昭和園內の同棲の日夜、張宗昌が省內四千萬民衆の膏血を如何に絞り取らうかとして、再び督軍としての暴威を逞うすべき日を畫策するのを、よく慰めた。

處が、張宗昌は昭和七年九月、刺客の爲め死んだ。そして遺した財產が驚く勿れ二億元である。

さて、此の遺產の分配である。張の遺言は、その大部分を第一夫人や二人の子息や、張の老母に與へて、十六人の妻妾には三千元づゝ與へることとあつたが、これでは十六人の妻妾が承知しない。中にも子供のあるものは、割增しを與へよと要求した。とにかく十六人の妻妾は結束して分配に異議ありと叫んだ。

勿論靜彌も大いに頑張つたことであらう。

が、此の遺産の分配にありついた後の靜彌は、どう行動するであらうか?。

とにかく、彼女は、藝妓だつた。從つて、同じ支那に食はれたにしても、商賣柄悧口な食はれ方をしたものだと云ひたい。

しかし、しかし、この話は一脈我々に、何となく佗しい感傷を與へるではないか。

ダンサーと段昌世

近頃のセンセイションナルな問題は、段祺瑞の孫の段昌世に、結婚の不履行と貞操蹂躙とを以て賠償を迫つた、東京フロリダ・ダンスホールのダンサーの行動だつた。

彼女は清水澄江と云つて二十二歳、麴町高等女學校の出身である。

父は代々豐かな旗本の家柄、母も亦旗本の流れである。しかし、富裕だつた彼女の家も沒落して、母は、嫁入道具として習つた長唄を商賣に、弟子を取つて暮すやうになつたが、それもひた〳〵と押し寄せて來る生活苦を支え切る譯には行かず、弟は代々木の鷄肉屋「鷄重」の小僧になつた。

彼女十七、女學校の三年生である、貧厨を見るに忍びなくつて、自ら母を說き伏せて、新宿武藏野館に案內人として始めて婦人職業戰線に立つたのであつた。

制服の處女から案內人へ、その容姿は忽ち學生連の焦點となつた。が、彼女は傍眼もふらずに働いた。しかし、活動館で得る收入は尠なかつた。

で、彼女は、ダンサーを志した。

十八歲の初夏のこと、彼女は八丁堀の國華ダンスホールで、ステップを踏む身となつたのである。

と或る日だ、七八人の友を引連れた若紳士が國華ダンスホールへ入つて來た。勿ち、香の高

い葉巻の煙が、澄江を中心に渦巻いた。

それが、段昌世であつた。支那政界の巨頭段祺瑞の孫である。

それからの段昌世の瞼に、彼女の姿が灼きついた。悶々の末、段は支那人一流の筆法を以て先づホールのマネーヂャーを籠絡してしまつた。

彼女は、マネーヂャーに呼ばれた。

「段さんの心持ちを毀さぬやうに、たのむぜ」

數日後だつた。

澄江は、九段坂上の支那料理店で、段と其の友人支那留學生八九人と晝食を共にした。その時、段昌世は、

「澄江さん！　私の妻になつて下さい！」

と、切なる胸を打ち明けた。

勿論、彼女は即答はしなかつた。

が、此の話を聞いた母は、貧に窶れた瞳を輝かせて、

「幸福にさえ、して頂ければいゝぢやないの」

と、寧ろ、此の結婚を勸めた。

そして、澄江が二十歳の四月二十一日、赤坂山王ホテルで、段昌世と澄江との結婚の内祝宴は開かれ、續いて伊豆に新婚旅行をし、小田急沿線の世田谷に同棲生活は始まつた。

段は、幸福に醉ひ乍ら、法政大學へ通つた。そして遠く、支那の親許へ結婚の許可を乞ふた。

が、その返事は餘りにも豫想に反して居た。

段は學資を絶たれてしまつた。

桃色の夢は僅かに二ケ月半、段昌世は突如歸國してしまつた。

そして、數通の戀慕の手紙が段から來た、が、其後は杳として、更に音信は無かつた。

澄江は、再び淋しくダンサーに舞ひ戻つたのである。

赤坂のフロリダ、其處は自暴自棄になつた彼女の、せめても吐息する場所だつた。そのうち彼女に段との結婚をすゝめた母は、胃癌で死んだ。

母の死に直面して、はつきり段昌世から棄てられた、欺かれた口惜しさが、彼女の胸に湧き返つて來た。

さうだ、金の爲めに段と結婚したのだ、金を取らずに置くものか！

彼女は遂に天津へ旅立つた。ホールで稼いだ金を旅費にして。

先づ、彼女が眼をつけたのが、天津のダンスホール、それを一軒〳〵廻つて居る中に、彼女は段昌世が日本人ダンサー奈々子と、巫山戯て居る姿を眼にした。

硬張つた表情で詰め寄つた澄江、それを見た段昌世の驚愕、だが、段昌世は澄江に諂びた。

そして資金調達を誓つた。

三日目に澄江の前に現はれた段は、僅か二百圓の金を出して、

「一と先づ歸國してくれ！」

と要求した。彼女は冷たく笑つて、その金を東京へ送ると、直接段家へ交渉の手紙を出した。

段家からは、逆に彼女を「强請者」として、日本領事館へ訴えて出た。すると、取調べに領事館の近藤警部補がやつて來た。

澄江の背は血走つた。近藤警部補に欺かれた一切を物語つて、

「餘り卑怯です！　力になつて下さい！」

と取縋つた。

怒つた領事館警察署は、直ちに段家へ强硬な談判をした。そしてダンサー澄江の手に、慰藉料三萬二千圓は握られたのである。

三萬二千圓、その金額は相當なものかも知れない、然し、蹂み躙られた乙女の心の代償とし

て、それは果して相當なものであらうか、しかも段昌世は今は上海で、日本人ダンサー奈々子と同棲して居ると云ふ。その奈々子の將來は……。

おゝ！　支那に食はれた女達、その孰れにも、人生の歡びが何處にある。救はれざる魂の啜り泣きを聞くのみではないか。

「マリツヂ、イズ、ゲルト」

呪ふべき言葉よ、消えて失くなれ。

花恥しき女賊末子

昭和九年六月十七日黄河口で支那の海賊に襲はれ拉致された山本富一氏の話は、當時かなりセンセイションを起したが、同年同月の三日公平號も福建沿岸で海賊に襲はれて居る。近來、福建沿岸の海賊が、盛んに跳梁するのは、頭目陳常琳や高誠學が再び活動しだしたからで、此の海賊のやり方が變つて居る。

先づ第一に、船へ乘客として潜入するのであるが、男は商人風、女は學生風を裝つて、しかも吉祥路文山女學校在學生だと云ふので、船員は歡待し、乘客は、霜降りの上衣、黑絹の袴、絹靴下に皮靴と云ふスマートな姿に魅せられて、非常に旅愁を慰められて居たのであつた。

それが、白犬洋にさしかゝると海賊の一人が突然、警笛を吹いた。續いて起るピストルの音！　乘客も船員も驚いた。

と忽ち、女學生風を裝つた女賊は、各々股間に巧妙に藏して居たブローニングを取り出して船員乘客を脅迫し、海賊船の屯して居る船下（地名）に舵を向けさせた。

船下の海賊船からは海賊頭高誠學が公平號に乘り移つて、船中の金品を剝ぎ取つた後、

「私等は皆さん民衆を救ふ爲め一揆を起さうとして居るが軍資金に困窮して居るから、遺憾乍ら皆さんから金品を拜借したのである、後日事なる時は必らず倍にして御返却する心算である

から、御姓名と住所とを書いて置いて貰ひたい」

と演說し、書記官と云ふものに住所姓名を書き取らせて、比較的有資產者だけを拘留し身代金各三百元をとられたゞけで、他の者は皆、自由を許された。

が、この可憐な姿に化けた女賊の頭目が、何と大和撫子であるとは全く意外ではないか。

その女性、それは南京大學卒業のインテリ頭目陳常林の妻として副頭目となつて居る北海道生れの中村末子(二四)である。

彼女は矢張支那呉服行商人の鄭文財に誘惑され、內緣の妻となり、一時臺灣基隆市入船町に住んで居た。其處へ、時々官憲の目を晦ます爲めに戎克金振順號にボーイとして化け込んだ陳常林が遊びに來て、遂に陳に末子は凡てを許す仲となり、本年の三月、臺灣から手に手をとつて對岸に逃亡し、姐御としての海賊仲間の豪勢な結婚式を濟ましたのである。

爾來彼女は、副頭目として美貌に笑を漂え乍ら、巧みにエロ戰術を發揮して、海賊襲來に凡ゆる便宜を與へて居るのである。

――が、これを、どうして正氣の沙汰と思はれやう。

自暴自棄が、せめても、この荒稼ぎの、あられもない作業をさせつゝあるかと思ふと、夕陽赤く沈む海賊船上の彼女の憂鬱な顏が見えるやうではないか。

全國女氣質

中部地方美人系「美濃、尾張」氣質

富岡鐵齊と云ふ天下の畫家が來る、と云ふので、近處近邊は、朝から其の噂で持ち切り、今か、今か、と岐阜の裏町では人々が心待ちに待つて居た。

「どんな旦那さまだらう？」

その好奇心からである。正午頃になつて、けば〳〵しく着飾つた葉茶屋の長女が腕車で、訪りかに、やつて來た。年の頃三十前後である、整づた美くしい顏だつた。が、その皮膚の靑つぽさが、葉茶屋の前に立つて居た少年には淋しかつた。

間もなく、葉茶屋からは、平素のらくらして居た親爺も內儀も、子供迄が忙しく出たり入つ

たりした。御馳走の準備であつたらう。

「え丶旦那を持つて倖せだ、すばらしい衣裝で來たぜ」

八百屋を摑まえて、靑物を値切つて居た細君達は眼を聳てた。

「本當に來るぢやろか？」

「かわい丶妾の家だもの、來るさ」

噂はして居ても、富岡鐵齊は、なか〳〵やつて來なかつた。

そろ〳〵待ち草臥れて、飽いて人が散つた頃は、電氣が、ぽつかりと點いた。

と、來た、來た、富岡鐵齊が——。矢張腕車で勢よく。

葉茶屋の家族は總出だつた。近所の者も出て見た。

妾と云ふ長女は眞つ先きに腕車の近くへ、

「お待ちしましたわ」

と、媚態を作つて、鐵齊の手を執つた。

腕車から降りた鐵齊は、よぼ〳〵の老人であつた。その老人が絢爛な婦人に手をとられて、嬉しさうにして、見窄らしい葉茶屋へ入つて行く姿。

「あれが旦那か！」

見に出た人々は、言葉もなく家の中へ入つてしまつた。

少年は、立ち盡して居た。あの婦人の旦那――それには、それ相應の年輩の人を、少年は心に畫いて居た。

のに、何とも釣合ひのとれぬ老人と美人、旦那と妾。

少年は何かなしに、悲しくなつた。金華山へと飛んで行く鴉の群を眺め乍ら、ぽろ〳〵涙をこぼした。

人生――と云ふ謎が、朧ろに、少年の胸を痛めつけたのである。

其夜、しかも、少年は、晩餐の時、德利から、ちびり〳〵酒を注いで居る父から、例の如く孝行論を聞かされたのである。

「見ろやい、お向ふの葉茶屋の子供達を。えゝか、みんな孝行ぢや、一番上の娘は藝者になつて、それから遊女になつて、京都の富岡鐵齊と云ふ偉い繪かき、それも、貧乏畫家ぢやない、どつさり金のある人に受け出されて、あんないゝ衣裝を着て、その上、毎月、きちん〳〵と金を送つて來る。次の娘も藝妓で、よく稼ぐさうだ、それで、葉茶屋のお父さんもお母さんも、子供は大勢あつても氣樂ぢや、呑氣に食つて遊んでござる。親に樂をさせる子は感心なものぢや、それが孝行と云ふものぢや、女の子を持つた親は羨ましいものぢや」

「うちの子供と來たら、男ばかりだから、どいつも、こいつも喧嘩ばかりして――」

母親が傍から愚痴だ。

「子供は三界の首かせぢや」

投げ出すやうに云ふのを、少年の兄は、自分の罪でもあるごとく首垂れて聞いて居る。少年は、しかし、さう云ふ父母の顏を、まじ〳〵と見た。あゝ云ふ若さで、あゝ云ふ老人の妾になることが孝行か？　孝行と云ふものは、どんな事をしても親に金を送ればいゝ、それを、ふと又悲しく思つた。學校で敎はる孝行は、餘りに幻想的で、父母親ら口に要求する孝行は、餘りにも現實暴露であるのが、判らない乍らに子供を淋しくさせてしまつた。子供心に、何故か美くしい婦人の爲めに泣きたく、そして、其の親が、我が貧乏な父母を羨ましがらせるのに、腹が立つた。

少年が、ほのかな戀心を持つた、葉茶屋の妹娘も、間もなく藝妓に賣られて行つた。得意氣に賣られ行く娘を見た少年の瞳は濡れた。此の少年は大きくなつてから、藝妓を呼ぶ席へ、しば〳〵出るやうになつた。そんな時、もはや人生をすつかり知つてしまつた彼は、流轉の末に、ぴよいと、葉茶屋の娘が、藝妓としての姿を現はしてくれるやうに幾度祈つたらう。若し事實現はれたなら、たゞ、無言で、彼女の手を執つて、

「御苦勞さま！」

と涙で云つてやりたかつたからだ。

「娘を賣つて左扇！」

左扇の言よ、呪はれてあれ！

――が、悲しいかな、岐阜地方は、娘が醜業に身を墮しても親に送金するのを孝行とした時代があつた。それを親も要求して悔ひず、娘も亦歡び、或は當然としたのである。

「男の子では役に立たぬ」

とは此の地方の日頃云ひ慣はされた言葉であつた。事實、中流以下の家の娘は、いゝ處で女工づとめ、そして藝妓、娼婦になつて行く。一時、吉原で最も多くを占めたのが岐阜地方出の娼妓だつた。

中部地方、名古屋、岐阜、大阪、あそこ邊りは不美人の尠い土地だ。整つた顏が多い。しかも、其の土地の感情が、これだ。花柳界に其の地方出の多いのも無理はない。そして、

「あちらの女はいゝ、客に惚れると云ふ事がない」

と雇主に歡迎されて居る。さうだ、彼女等は、ラヴも青春も、ゲルトに換へて居るのだ、そして誤つた孝行の道を喜んで辿つて居るのだ。

從つて、情趣ありさうに見へて、濃やかさうに見へて冷たいのだ、心の底が。窮極は利害しかない。利あれば戀愛となり利なければ戀愛は成り立たぬ。花柳界の雇主にとつて、最もよい條件を備へて居る。だから至純な情熱はない。いつも冷たい自己が心の底に、こり固つて居るのだ。

やがて、それは其の土地の上流の婦人達の氣持ちの中にも溶け込んで行つた。

「おきやあせ種は薄情だ」

の言葉も其處から出て來た。

中部地方の女性に對して、戀愛至上主義を以て臨む者あらば、直ちに失敗だ、戀愛功利主義しか成り立たぬと知るべし、しかし、利ありと見れば其の親切、其の情熱、いとも濃やかなるものと知るべしだ。

金の切目が緣の切目と、あきらめのよい男こそ、正に、おきあせ種地方の美人を望むべしだ。從つて、落魄の極――など云ふ悲劇的美人の存在も尠い。

常識的な、自己を守るに忠實な、微溫的氣質、それこそ、美濃、尾張の女性の通有性であらう。

關東婦人と靜岡女性

其處へ行くと、野暮なやうだが、關東の女性は義氣と情熱に富んで居る。

戀愛至上主義、大いに可なりである。惚れたが因果、と何處迄も徹底する婦人も多い。

關東の女性氣質を述べるには、先づ東京の女を語らねばならぬ。

その昔「生馬の眼を拔く」と酷評された江戸。それが今の東京となつて、人の氣質は如何變化したか？

「油斷のならぬ東京人」と單に一言で片附けられるであらうか？

それは此の夥しい群である東京人の中には、既分油斷のならない人間も居る。が亦、何とも云へぬ純情な人間が隨分ある事を否めない。

都會人は獪い、地方人は朴訥だ、との概念は、もはや置き變へられなければならぬと思ふ。東京を都會とし他を全部地方として、狡いとか、朴訥だとか云ひ切る事は大層な間違ひである。

今の東京は、これは、一面の觀察であるが、正直で實意のある人間が、往々周圍の狡獪さから、已むなく上京し、せめても再起を計つて居る人が、かなり多數だ、所謂「落ぶれて袖に

涙のかゝる時、人の心の奥ぞ知らるゝ」で、すつかり人の心の奥を知り、鄕土に絕望して東京人となつたものも尠くない。

東京人は、一つは極端な幸福人と、一つは極端な悲劇的な過去を持つものの集團と云つてい、地付の江戸つ子もありはある。が、此の本當の江戸つ子の今の姿はどうか、江戸つ子程氣質が良くて、地方人に、ぐん〳〵押しつけられて行つた事實をどうする、私は江戸つ子の胸擴さを感ぜずには居られぬ。

さう云つては怒られるかも知れぬが、眞つ裸になつても同情するのは現在の東京人である。これは自分の立場を飽迄守つて、おこぼれ式に同情する地方とは大きな開きがあると思ふ。尤も、此處でも、云つて置かねばならない、地方人に私は眞つ裸的同情が必らずしも皆無であるとは云はないが、尠いことは事實だ。

その原因は何か？

過去に、それ程郷土を見捨てねばならぬ程の悲劇や迫害の經驗がなかつたから――だ。これ故にこそ、郷土に居續けられたのである。地方から出て來て、自分には郷里はないと感じ、東京が我が墳墓であるとする人の心に、同病相憐の心境が嚴として存在するのを私は認めて居る。

それに東京は、もはや流動都市の形より、一つの傳統を生み出して居る。個人生活も要するに信用の畜積でなければならぬ時代となつた。

其處で、先づ東京の婦人觀に及ぶと、第一東京は美人も不美人もある。が、その裝飾美に比較して、先づ地方より概して美人は尠いと見るべきだ。

が、その顏の美醜は一歩標準を變へると、流石に東京である。潑溂美、明朗美、聰明美、それ等近代的要素の美人は、何と云つても東京である。

東京の女氣質は――敢て云ふ、寧ろ單純である。東京の女は惚れ易い。惚れた表現を、ぐんぐんとする、そして其の反面に男性に欺かれ易い。昔は地方の女性が、隨分欺かれて涙を流したものだ、が、今は東京の女が、かなり欺かれる、地方の女の方が、しつかりして居る。つまり東京の女は、男を信用し易いからである。

が、執着は、東京の女に淡い。東京で修練を積んだ女は、捨てられても、直ぐに諦める、そして第二の生活に、未練なく入る。愚痴を東京の女は厭ふ。愚痴を云ふ程、愚かでない事を自負して居る。

「あたしが惡かつたのだから仕方がないわ」

この氣分と、も尠し積極的に行つて、どしどし談判して、其の結果、

「あんな判らない人、相手にならないわ」

と來る。いや對手に取つて不足だと考へる、過去より未來へ――それが東京の女が持つ常の心持ちだ。

從つて明るい、轉化も早い。狡猾さは、先づ尠いと見ていゝのである。名古屋地方の女性のやうな、自己を守る點、利害觀念に厚い點は先づ尠ない。さつぱりしてゐる――の言は、よく東京の女を表現して居る。

東京が、このやうであるから、關東大體の氣風は、それを受けて居る。群馬へ行つても栃木へ行つても、茨城へ行つても、女性は、さば〳〵して居る。いや時には、殺風景であり過ぎ、情趣の無さが淋しい位である。ロマンチックな甘さはない。それだけに正直さと、一度、思ひ込んだ時の强さとがある。

同じ關東でも、千葉縣へ行くと、明るい海に面して居り、土地も溫かい爲めか、女性は、とかくにルーズな點がある。然し、此のルーズさは決して狡猾であるのでなくて、反つて、單純過ぎるルーズさである。打算的でもない。寧ろ時には、その反對である。

が、關東的な情熱はある。打算を打ち超えた情熱であるだけに烈々火を灼くものもある。ルーズさも素朴な嫌味のないルーズさである。

關東で打算的な婦人の多いのは神奈川縣であらう。それは昔の宿場（東海道五十三次）が多く、その上、明治維新以後横濱と云ふ開港地を持つて、輕薄な、狡猾な、打算的な、惡影響を受けて居る。なか〳〵に油斷がならない。先方も油斷をしない氣質である。

凡てが金で、ものを云はす――と云つた風、又、金でものを云はれゝば、非常な柔順さをしめす、現金な點がある。

それかあらぬか、本牧の國際女性は、三浦三崎の人が多いと云ふ。一つは體力もあるからだが、然し、根本的な此の物質觀念から、あゝ云ふ事を是認すると云ふことが云へなくもなからう。

埼玉縣には遊廓がない、それ故にか、關東女性の中でも、先づ潤ひのある方と見ていゝだらう。

關東と名古屋方面とをつなぐ靜岡縣、此處の女性に復雜性が尠い、明るく、物資に豐富、氣候も良いからであるが、凡てが、おほまかである。從つて女性の氣質も、つきつめた點は尠く深く考へる點も劣つて居る。

それだけに明朗であり、人も信じ易く、興味も潤ひもある。秋霜烈日のやうな貞操觀念も利己感情も無いかはりに、極端に娼婦的な趣きもないのである。平明――と云つた女性氣質である。

殊に伊豆へ入ると、此の平明に情熱を負びて來るのは、伊豆の山々を見た感じと同じである御神火の大島も、伊豆の氣風に多分に染んで居る。

東北、北海道の女性

純朴と云へば東北の女性を指せる。東北人が、鈍重であり、正直者である事は世間、既に定評がある、如何なる境涯に入つても、東北人は全然功利的には成り得られない。

近年、土地の凶作其他で、非常に娼婦となるものも多くなつた。然し、東北の女性は、さうした轉落をも、自身の當然の運命として、甘んじて居る。それを以て、どうしやうとは考へぬ已むを得ぬとして居り、又、その境涯を、さほど迄に辛いとは考へぬらしい。

從つて、名古屋方面の樣に、花柳界の雇主側で、必らずしも喜ぶ條件には、あてはまつて居ない。

情熱起れば、東北の女性は執着が強い。客に大いに惚れる。惚れて、その結果、めちやくちやになつても先方も恨まなければ、自分も大して不幸だとは考へぬ。人の好さ、根の正直さから、人情的な淵味で、自分も人も包んでしまふのである。

恨みあつてもその通りであるから、恩あつても左樣である。東北人は忘恩の徒だ、と云ふ酷評も時には聞く。忘恩ではない、自己の正直さ、親切さから、さほど恩にも思つて居らず、盡

すべき時は、恩とか愛とかの比例は別にして、自分のやれるだけ、やる氣質を持つて居る。

東北の女性のよさを、私は此處に見る。

東北の女性には、美くしいけれども一脈、冷たいものがある他の美人國と、違つた曖昧を感ずる所以だ。

北海道は、東北の影響を多分に受けて居る。北海道の女性は、時として、あまりに人の好い爲めに泣かされるものがある。が、それ故に、東北、北海道の女性に、より賢くなれ！　より油斷すな！　とは私は云ひたくない。それは、東北、北海道のよさを、鈍重の、正直の、人の好さの、與へる人生の潤ひを失つて行くものであるから。

北陸、信越地方女人色

北陸地方は昔、越路と云つた。

何となく越路と聞くと懐しいロマンチックな匂ひがする。

果せるかな、やんごとなき我邦の戀愛神、我等の出雲の神樣である大國主命が、事もあらうに失戀しかゝつたと云ふ經歴がある。

して見ると、今の北陸道一帶、即ち越路は隨分美人國の老舗であると云はねばならない。否寧ろ、高志（越）の國こそは日本で一番最初に美人國の折紙を付けられたものと云つてよい。此の點、出來立ての、ほや〳〵の新店の感じがする三都美人や中京美人に比して、時代の磨きが掛つて居ると、北陸道の女性は大いに氣を吐いていゝ、傳統の光がある。

さて、當時の高志の國は、先住民族＝多分アイヌ族だつたとの說が多い＝が、住んで居て美人の多い事で聞え高く、その中で、沼河姫は最も代表的な美姫として交通不便な當時に於てすら、全國津々浦々に普く知られて居たのであつた。

其處で、大國主命は大きな袋を肩にかけ（これは保證の限りではないが）惚れて通へば千

里も一里と、遙々、出雲の國から越路へと、沼河姫戀しと旅せられたのである。

「沼河姫！　來ましたぞ、遙々と訪ねて。私は出雲の國の八千矛神（大國主命の別名）ですよ！」

何がさて、當時の高天原民族の代表者大國主命である。勿論大なる自信を持つて、天下の美人、沼河姫が、喜び躍り上つてお迎ひに出るだらうと豫期したのに、丁度此の時、何か仕事をし乍ら出雲の神の聲を聞いて居た沼河姫は、そつと板戸の隙から覗いて見て、ぱつたり戸を閉めて奥へ入つてしまつた。

こんな筈ではなかつた――と、此のすげない仕打ちに呆れたが、何分、戀の神で戰の命、それに素晴しい即興詩人であつた大國主神は心を取直して、聲高らかに歌つた。

八千矛の神の命は、八島國、妻求來かねて遠々し、越の國に、賢女を、有りと聞かして、麗女を、有りと聞こして、さ結婚に、あり立たし……

何と切々たる情が吐露されたではないか、遠國から、わざ〳〵訪ねて來たものに、草鞋の紐も解かせず、旅衣もぬがせずして、戸を締め切つて奥へ逃げ込むなどは餘りと云へば酷過ぎると難じ給ふたのである。

それを聞いた沼河姫は、元來、美人としてのプライドから、日本に於ける肱鐵砲のトップを切りたかつた（と私は想像する）だけなのでから、忽ち

八千矛の神の命、軟草の、女にしあれば、吾心、浦渚の鳥ぞ、今こそは千鳥にあらめ、後には和鳥にあらむを……

と歌つた。そんなに早く悲觀して下さつてはいけないわ、決して〳〵短氣なことをして下さいますな、夜になれば、あたしだつて……、と云ふ譯である、さうなくてはならぬ筈、何しろ對手が出雲の神さま、ラヴア冥利につきてしまふから――。

で、沼河姫と出雲の神との戀愛は今日迄も傳說として殘る程に、嬉しい事になつてしまつた

が、兎にも角にも、ほんの一寸だけでも出雲の神さまに、失戀の氣持ちを味はせたゞけ、越路の美人の氣の强いのには驚かされる。

美人としての氣の强さを、越路の女性として發揮したのは其の次に佛御前がある。

時しも平氏に非れば人に非ずと驕りの絶頂に登つて居た平氏の頭領、平清盛の寵愛を一身に享けて居た妓王は全國女性の羨望の的であつた。

が、――加賀の國の佛御前、此時、僅かに十六歳だつたが「何の妓王が如何に美人であらうとも、昔から美人系統で名高い越路に生れたあたしだもの負けるものか、一つどつちが美しいか美人較べに出掛けよう」と云ふ素晴しい希望を抱いて、これは又、出雲の神とは反對に、のこ〳〵京都へ出掛けて行つて、京は西八條、清盛の館に押し掛けた。そして

「越路から美人が來た、清盛どのにお眼に掛りたい」

と申込んだ。聞いた清盛、頭から湯氣を出して怒つた。

「無禮者奴！　清盛を何と心得る！」

忽ち、摑み出されようとした處を、妓王が一寸興に惹かれて、

「でも、御前、一さしだけ舞はせて御覽じては？」

と執り成した。他ならぬ妓王の言葉である、清盛は澁々、佛御前を召して舞はせた。

佛御前は、此の時とばかり、

〽君を始めて見る時は、千代も經ぬべし姫小松、御前の池なる龜岡に、鶴こそ群れて遊ぶめれ

と歌ひ乍ら舞つた。その美くしさ、あでやかさ。

見て居る中に、清盛は心も身も融けさうになつてしまつた。妓王の前をも構はず、清盛は横抱きに佛御前を抱いて奥へ入つた。

「失敗つた」と、妓王は悔いたが、もう取返しがつかなかつた、たうとう、妓王は寵を佛御前

に奪はれて追ひ出された。だから、

萌え出づるも枯るゝもおなじ野邊の草
いづれか秋にあはで果つべき

と一首を殘して出家してしまつた。それを聞くと、今度は佛御前、

「あたしは、あたしの美くしいと云ふ事が天下に知れゝばそれでいゝのだわ、別に清盛さんなんてそんなに思つてやしないのよ、たゞ、あたしの美くしさを認めさせる道具だつたんだわ、だから一處に出家にして頂戴な、ね、妓王ねえさま。」

と、ねだつて、清盛を振り捨てゝ尼入道になつてしまつた。

俳人、加賀の千代女だつて、なか〳〵此の美人としてのプライドは高かつた。初めて夫を迎へる時の吟に、

淵かろか知らねど柿の初ちぎり

とある。そのかみの、世の常の女性のごとく、新らしく迎へる夫に恐怖と羞恥とばかりで弱かつたのに比すると、何と云ふ、がつちりさであらう。

北陸三縣で、遠慮なく云へば福井は越路の美人國への入口である、それから石川の金澤へ行つて如何にも北陸美人を感じ、更に富山へ行つて美人脈は一カーヴを畫き、更に新潟へ入るに到つて爛熟の極に達すると云つていい。

東男に京女と云ふ言葉があるが、ずつと古く、出雲男に越路女とも云ふべき、天孫民族の美と、先住アイヌ族の美とを併せた北陸の美人は、凡て、おつとりして居て、靜的でクラシカルである。加賀美人の代表としての佛御前などには多少の潑溂さが見えるが、然し、直きに妓王に感じて出家得道したりなどする處の純眞な氣持ちは、矢つ張り北陸美人通有の靜的な情趣への還元と見るべきが至當であらう。

一體が、金澤は如何にも大藩の舊城下であると云ふ感じのする。何處かに、のんびりした處

がある。從つて朗らかで、おほまかである。だからして金澤美人は、おつとりとして落ち付きがあつて、何となく平民的美人の感じを受ける。能登半島へ行つても其の感じは深い。一つは能登の北岸時國が、平大納言時忠の子時國が流謫され、それから其の子孫が時國を姓とし、遂には地名に迄成つてしまつた、その影響も確かにあると云つていゝ。

富山は同じ美人系に属し乍ら、一つのカーヴを畫いて居る、と云ふのは金澤の靜的なクラシックな味が、此處へ來ると、丁度、能面のやうな感じを受けるからである。つまり、遂に行きつく處へ行つたやうな感じである。だからして顏も金澤のやうに圓味を負びた潤ひよりも寧ろ長味を負びた顏の輪廓の美くしさを感ずる。

が、北陸三縣の美人は濃艶である場合があつても妖艶ではない。妖艶な美人は新潟である。が、その新潟も妖艶ではあるが凄艶と云ふ感じはない。凄艶と云ふ感じは信濃である。長野縣には凄艶な美人が多い。

信濃は、大國主命が國を天孫にお讓り申し上げた時、其の子速御名方神が御不服であつて遂に天津神の使者たる武甕槌神と御力比べをされて、それに敗れ、一族を率ゐて遁れて來られた土地である。其の初の住居は諏訪の神となられたのであるが、從つて信濃の國は氣象の激しい天孫民族の血が傳はつて來て、其の美くしさに置いても、ぐつと胸に來る、迫力の强い美くしさ、凄艶と云ふ感じが頻りにするのである。

松井須磨子は信濃美人を代表して居る。其の性格と云ひ美くしさと云ひ、あれが信濃の美人型である。一體男でも女でも信濃の人は冷熱の度が激しい、愛するとなると灼熱する戀情に身も心も溶かされてしまふ。去り乍ら一度冷たくなると、それは氷以上の冷かさである。信濃の國の人は從つて偏狹である、だからして、信濃の美人に別れてから未練を持つたりしたなら、それこそ慘めである。熱した間と冷えた時と、その區劃は判然過ぎる程判然とする。其の點、甚だ理論的である、一面進歩的な感じを與へるが、しかし、その爲めに、やんわりとした味は

勘ない。胸のすくやうな酷烈な味ばかりである。これは私の正直な體驗に基いてゞある。

其處へ行くと正體の摑めないやうな妖艶さ、それが新潟美人の特徴である。故伊藤博文公に寵愛された東京新橋中村家の小豐は、『楊貴妃のやうに艶麗』と評されたものである。矢張新潟美人の一人であるが、全く新潟には楊貴妃のやうな感じの美くしい女性が多い。古くは長尾爲景の愛妾松江、これは「越後高尾」と迄云はれ、故後藤猛太郎夫人となつたおるんさん、それに、あの謹厳そのものの山本權兵衞伯にしてロマンチックな物語を生ませた伯爵夫人も新潟美人なら、謹厳さの點では、これも名高い三條實美公をして夢中にさせた吉原金瓶閣の今紫も亦、此の妖艶な新潟美人である。

故岩野泡鳴の最後の愛人である英枝未亡人が矢張、新潟で、映畫女優の川田芳子も新潟市の生れである。佐渡からは碁打ちで、しかも謠曲の喜多六平太氏夫人の喜多文子さんが出て居る

かくては永井荷風氏のおもひものであり、つひ先だつては、男から男へと飛び石のやうに、

跳ね廻る山田順子の爲めに若き愛人勝本清一郎氏を寢取られてしまつた處の藤間靜枝さんも紛ふ方なき新潟美人であることは、あの艶麗な踊の手振りにでも見えよう。

一體、新潟縣は古來から金持ちが多かつた。しかも、大して貧乏人はなかつた土地である。從つて、金ある處には享樂があり、享樂のある處、矢張、美人は非常に持て囃された。だからして新潟の花柳界は常に美人を以て充たされて來た。

たゞに花柳界ばかりでなく、一體に新潟縣の女の人は色が白くて、ふくよかで、圓い、あどけない眼をした美人が多い。これは矢張物質的に餘裕があつたから、自然、美に對して、關心が深かつた爲めでもあらう。

が、此の新潟美人の特徴である處の、圓い、あどけない眼——一寸斜視かとも見える其の眼は、決して、あどけなくはないのである。新潟女性の有つ特徴は、何よりも、しつかりさ、である。それが、この眼の奥に藏されてある。

大體、新潟の人は物質に對して執着が強い。從つて、新潟の女性には意氣張りや、センチメンタルな處は尠い。現實的である。

新潟美人と戀するには何よりも金である。よく、一押し二金三男――と云ふ言葉があるが、新潟では押しも男も不必要である。外交術の巧拙、美男不美男、そんな事は問題ではない、金である。たゞ金である。金の前には新潟美人は、其の濃艶な美を惜しみなく差し出して呉れる。（新潟美人よ、願はくば寛恕を賜へ！）

それだけに、成るべく高く評價させんが爲めの美である爲めに新潟美人は取り濟した人形的美人であることを否めない。

感情生活の激しい信濃美人の眼は刺すやうである。往々にして魅殺される、だが、現實的な物的な新潟美人の眼は大きく圓く、あどけなく、金澤、富山の美人の眼は靜かに美しく福井美人の眼は凉しく怜悧である。

考へて見ると上杉謙信などゝ云ふ男は羨望の到りである。越山併せ得たり能州の景、などゝ云つて、北陸道一帶、越路のクラシカルな靜的な美人を侍らせ、時々は信濃路に突擊して凄艶さを味ひ、さもあらばあれ家郷の遠征をおもふは――などゝ越後の妖艶を回想するなど贅澤な沙汰である――と今更にフン慨させられる。裏日本の美人系と日本アルプスの美人脈とを股にかけたのだから――。

近畿、中國、九州色

美人としての感じでも、性格でも、圓滿と云ふべきは京都の女性である。

そして、京都の女性は人形的な存在が多い。非常に、妥協性に富んで居る。

其處へ行くと、大阪の女性は、妖艶な美人が多いのでも判る如く、誠に一種の、しつこさを持つて居る。自分の生活、幸福への突進、それは一歩の假借する處もない。たゞ、ひたむきに

進む。妖艶さも、その徹底した、ひた向きへの一つの方便であるとさへ思はれる。功利的であるのは勿論だ。だが、時として大阪には變り種を生ずる。それは、かほどに利に追及的であることに反感を抱いたものの中にある。その種の女性は、又、徹底的に情感の爲めに身を灼く。利害、幸不幸、それ等を度外して、死をも尙ほ歡受する處がある。しかし、云ふまでもなく、これは反撥の副産物でしかない。

中國、四國地方の女性は、所謂中道を得て居ると云ひたい。相當に明るく、相當にのんびりとし、相當に悧悋である。

九州へ行くと、南に下る程、女性は、よく働く。

鹿兒島などは、街上に物を賣るのも、立ち働いて居る者の姿も、魚市場の群れた人も、みんな、大部分が女性であるのに驚かされる。

中には、芳紀明眸徒らに、羞恥の情に驅られ勝であるべき女性が、甲斐々々しく、鹿兒島名物の大根を擔つて行くのを見受ける。

「これでこそ、男子が家を外にしても、國家の爲めに安んじて働けるのだ」

維新當時、輕躁の人々が、勤王の爲めに、日ねもす、夜もすがら働いたことに、しみじみ、蔭の女性の力を見逃してはならぬ、とは、此の地方を旅行した時、痛感した事であつた。

九州程、女の働く處を、私は他で見たことはない。

しかも、九州の女性は、何處かに、きりりつ、と引き緊まつた感がある。が、引き緊まり乍らも、其處に謂ふに云へぬ優しい情感を持つて居る。矢つ張り、南國であることを頷かせられる。

しかも、整つた顏が多い。圓味を持つた。それは、妖艶凄艶と云つた感じには乏しい。

が、とにかく、親しい美くしさである。安らかな美くしさ、働くことに愉快を感ずる美くしさである。

一方、さうして男優りの働きもするだけに、なか〳〵の俠氣に富んで居る。同情心に厚く、肌も人の爲めによくぬぐ。

――が、關東のやうに、感情の爲めに、むきになつて、凡てを度外して、と云つた傾向ではない、同じ俠氣であるにしても、ちやん、と冷靜な判斷をした上で、やつてのける。それだけに、永續性のある事が認められる。

流浪に賦す

歸國

此のふねやいかに思ひの
かずかずを
のせたるならむ
本土近づく

朝鮮

連絡船の
笛の音遠く
夜風冷え
釜山の街の
魔の如き眠り

膝下

たちちねの
老ひたまへるに
手をつかへ
しみじみ知りし
流浪の姿

浅草にて

仲店を　さすらふ
ときの　我が顔の
如何に　寂しと
ふと　考へし

昭和九年十二月二十七日　印刷
昭和十年一月二日　發行

復製不許

女性への危險信號
定價　一圓五十錢

著作者　松波治郎
發行者　東京市中野區大和町三一六　野崎信夫
印刷所　東京市中野區大和町三一六　農藝社印刷部

發行所　東京市中野區大和町三一六　野崎書房
振替口座東京四九〇六九番

終

野崎の書房版